里の語りべ ⑮

小野川の逸話　第3話

焼け残った表札の跡

語り：越川 悦子さん（佐原イ）

◀奇跡的に門の中央で炎が止まり、表札の焼け落ちた跡が今なお残る

伊能忠敬旧宅の門の内側上部を見ると、左から右へと火の手が走り、柱にあった表札が焼け落ちた跡が浮き出ているんだけど、分かるかしら？　明治25年12月の佐原の大火は、筑波おろしの強風で忠敬橋側から次々と家屋に燃え移り、火の手は伊能家にも及ぶところ、「先生の家を守らないと！」と駆け付けた人たちによってギリギリ消し止められたそうよ。自分の家の井戸へ商人の命ともいえる銭箱と大福帳（売買の勘定を記す元帳のこと）を沈めるなり、急ぎ小野川の水を汲み上げて行われた決死の消火活動、いかに忠敬が慕われていたか分かるでしょ。忠敬は名主として天明の洪水や干ばつの際に、私財を投げうって米や薬を施していたから、恩義を感じて多くの住民が立ち上がったのね。この焼け跡は、「伊能忠敬の人柄と、住民の結集の証」といえるでしょう。

今、小野川は遊覧船が行き交う静かな観光地だけど、昭和初期まで最盛を誇った商業都市佐原。おかげで生まれた「町並み、伊能忠敬資料、佐原の山車祭り（ユネスコ登録）」という3つの宝がある。これらは国指定の文化財となり、「東京にない江戸がここにあった佐原」という名のポスターができたほど誇れるものなの。この佐原の良さを伝えたい、次の世代に守ってほしいという思いから、私は「小野川と佐原の町並みを考える会」の一員として活動していて、観光客へのガイドのボランティアはその一環なのよ。

終

香取文芸

応募方法　はがき1枚に俳句2句・短歌2首のどちらかと、本名、住所、電話番号を記入し、〒287-8501　広報かとり「俳句」または「短歌」の係まで。毎月20日までの到着分（12月は15日締切）を審査し、翌々月号に掲載。掲載される作品は、選者により評を踏まえて添削される場合があります。

俳壇

谷本　元子選

憂ひ事いつも唐突曼珠沙華　　関　いさお（三島）

評　毎年いつもの場所に、律義に唐突に咲く曼珠沙華。作者に訪れた憂い事も、突然にやって来たのだろう。憂き事が去れば、必ず佳き事も訪れる。畦を朱色に染める、あの曼珠沙華の華やぎのように…。

湯上がりのしばしちちろの声優し　　黒田　昭二（佐原イ）

白萩や古刹帰りの女坂　　本宮　みつ（小見川）

名月を猪口に浮かべて独り酒　　相原　清次郎（大倉）

農に生き農に勤労感謝の日　　森川　哲男（木内）

歌壇

篠塚　礼子選

昨日より今日と老化のすすみをり鏡に映し活を入れたり　　関　いさお（三島）

評　幼児は昨日までできなかった事が今日はできるようになる。高齢者はその反対。悲しい老化の現実である。しかし作者は、「なにを、まだ頑張るぞ」という思いからの行動を明るく詠んでいる。人生百年時代、元気で生きましょう。

真夏日の返ると思うに俄雨庭辺吹き過ぐ風は秋めく　　鈴木　一満（八筋川）

わらべ唄ふと口ずさむ数珠玉の葉ずれの音に寄りゆきながら　　篠塚　みのり（小見川）

玄関に野菜どっさりは友からか小雨の庭にのこる靴跡　　郡　千恵子（下小川）

病窓のカーテンあけて雲にのり征きたる夫の元にゆきたし　　多田　エイ（小見川）